

何にもそういう感じが切々として胸に迫り、真に無量の感慨に暮れざるを得ないのである。

今から七、八年も前だったか、京都の嘉楽（校長三村信氏）安井（校長石田牧之助氏）の両校で講演をした時、特に六年の男女児童のつづつた感想文を恵まれたことがあったが、それは実に可憐なる少年少女の偽らざる印象記であつて、とても感慨深いものであつたのである。実はその内容は機関雑誌に掲載したいと思つて居たが、参考のため二、三を掲げることになしようと思う。

（安井校六年生 中村欽吾）

「僕は、速記については知らなかつたから、どんなものだろうと思つていたが、案外に早く、又かたんに書けるので驚いた。僕は学校から帰つた後にこんなに考えた。今の日本の国字が大変にむずかしく、又大そう文字の数の多いのは、日本の文明の発達していかない事を言ひ表しているものだ。この貧弱な国字を有している日本に、かくの如きかんたん明瞭なる文字の生まれた事はひとよるこぶべき現象である。この速記文字が、たとへ日本の国字にならなくても、日本全国に普及すればそれだけ日本の国民が幸福であり、且つ国家の文明の進歩した事になる。」